青森県総合学校教育センター　教科等教育長期研究講座報告　[2013.3]
Ｇ１－０３

中学校　国語

中学校国語科の学習において，鑑賞したことを的確に書く能力を育成するための指導法の研究
－他教科の言語活動を振り返る学習活動を通して－

平川市立平賀西中学校　　教諭　　木　村　　恵　子

要　　旨

本研究は，中学校国語科の「書くこと」の領域の学習において，芸術などの作品について鑑賞したことを，的確に文章で表現する能力を育成するための指導法について考察したものである。他教科（音楽科）の学習で書いた鑑賞文を国語科の授業で振り返らせることにより，鑑賞したことを観点や根拠を明確にして書く能力を育成することができるとともに，他教科において鑑賞文を書く言語活動を行う際にも活用できるようになることが分かった。

キーワード：中学校　国語　書くこと　言語活動　鑑賞文　振り返り

Ⅰ　主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年３月告示）では，国語科の改善の基本方針として，「実生活で生きてはたらき各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」に重点を置いて内容の改善が図られた。国語科の学習で身に付けた国語の能力を，各教科の学習において活用できるようにすることが求められているのである。そのためには，教科担任制である中学校では，国語科の学習と他教科等の学習を意図的に関連させて指導することが必要であると考える。

そこで，本研究では鑑賞文を書くという言語活動に焦点を当て，それが他教科の学習のどの場面で活用されるかを生徒に意識させるとともに，音楽科と美術科の担当教師とも連携して，効果的な指導の在り方を探るべく研究主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

他教科の学習で書いた鑑賞文を国語科の授業で振り返らせることにより，鑑賞文の目的や内容についての理解を深めさせ，鑑賞したことを的確に書く能力が育成できることを，実践を通して明らかにしていく。

Ⅲ　研究仮説

中学校国語科の学習において，鑑賞したことを的確に書く能力を育成するために，次のような指導をすることが有効であろう。

〇鑑賞文の目的や内容を明らかにする。
〇他教科と関連した指導として，音楽科で書いた鑑賞文を振り返る学習を行う。
〇国語科で学習したことを踏まえて他教科（美術科）で活用できるように，指導の手引を作成する。

Ⅳ　研究の考え方とその実際

１　研究における基本的な考え方

(1) 鑑賞文の目的や内容を明らかにする意義

学習指導要領では，各教科等において言語活動を充実することが述べられており，国語科においては，それらの基盤として言語活動を行う能力を育成することが求められている。例えば，鑑賞文を書くという活動は国語科だけでなく音楽科や美術科においても行われるが，国語科の学習において，鑑賞文の目的や

内容をしっかりと指導することが，他教科の言語活動にも役立つのである。しかしながら，これまでは教科書に従って，文章を書く手順を指導するにとどまり，鑑賞文の目的や内容について指導者がきちんと理解した上で生徒に指導してきたとは言えない。よって，研究を進めるに当たり，文献等をもとに鑑賞文の目的や内容を明らかにする必要があると考えた。

(2) 他教科（音楽科）で書いた鑑賞文を振り返る学習の意図

中学校は教科担任制であるため，国語科で学習したことを生かして他教科等で言語活動を行うのは容易ではない。国語科と他教科の担当者が連携して指導するとともに，国語科の学習で身に付けた国語の能力をどのような場面で活用すればよいのかを，生徒自身に理解させなければならないと考える。

そこで，本研究では，音楽科で書いた鑑賞文を国語科の授業で振り返り，鑑賞文の目的や内容を指導した上で書き直させる。さらに，その学習を生かして美術科で鑑賞文を書くというように，他教科との関連を図ることにした。このことにより，実生活や他教科のどのような場面で鑑賞文が活用されるのかを生徒に理解させることができるとともに，国語科で学習した方法で書けるということが理解できるだろう。

(3) 指導の手引を作成する意図

国語科で学習した鑑賞文の目的や内容，書き方を他教科（美術科）で活用できるように，指導のポイントをまとめ，指導の手引を作成する。その際，あらかじめ他教科の担当者と協議して，指導する際にどのような課題があるのかを明らかにして内容を工夫する。

この手引は，他教科の担当者が参考にできるとともに，生徒も国語科の学習内容を再確認することができる。それによって，他教科の言語活動を通して国語科の学習内容を定着させることにつながるだろう。

2　研究の実際

(1) 鑑賞文の目的や内容についての分析

鑑賞文について，河野庸介は，「鑑賞とは，ある芸術作品について自分の立場からそのよさを味わうことである。『意見文』が書き手としての自分が出るのに対して，『鑑賞文』はテキストとする『芸術的な作品』に寄り添うものである」と述べている（河野庸介，2009）。これをもとに，各教科等で行われる言語活動としての鑑賞文の目的や内容について，次のように分析した。

○目的……作品のよさ(魅力)を相手に伝える。 ○内容……テキストとする芸術的な作品などのよさ（魅力）について感じ取ったことを書く。 （ポイント）・自分が感じ取った作品のよさ（魅力）を書くこと。 ・作品を鑑賞する観点を明らかにして書くこと。 ・その観点から気付いたことを根拠や理由として書くこと。

(2) 他教科（音楽科）で書いた鑑賞文を振り返る学習計画の作成

音楽科で「魔王」の曲を鑑賞した際に書いた鑑賞文を国語科の授業で振り返る学習（以下，振り返り学習とする）を設定し，次のように単元の学習計画を作成した。

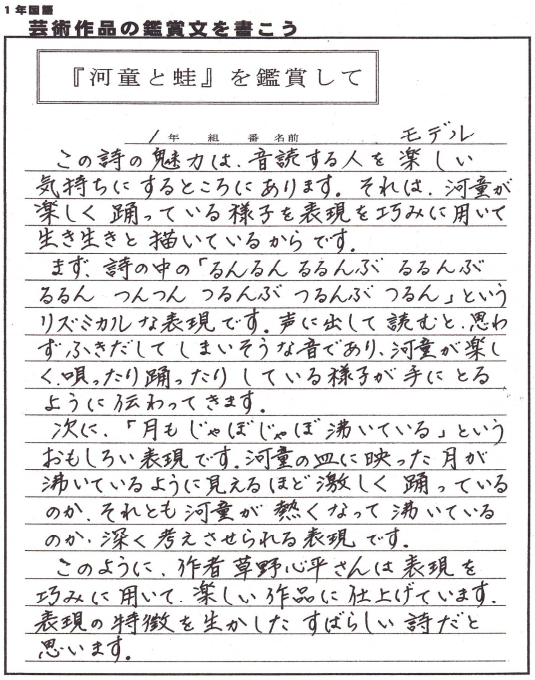
ア　モデルとなる鑑賞文の提示

鑑賞文の目的や内容について理解させるために，第１学年で学習する詩「河童と蛙」(教育出版，第１学年)の鑑賞文を作成し，モデルとして生徒に提示した（図１）。鑑賞文の目的や内容についての分析を踏まえて，音楽科や美術科で書かせる鑑賞文のモデルにもなるように，次の点に留意して作成した。

○構成：根拠や理由と意見との整合性を意識させるために，最初と最後に意見を述べる双括型にする。

○内容：・１段落目に，「作品のよさ(魅力)」を入れ，自分の考えをまとめて書く。
・２，３段落目に，自分の考えの根拠や理由となる「具体例」を二つ挙げて書く。
・４段落目に，「観点」を入れてまとめる。

○文字数：原稿用紙１枚４００字程度を目安として簡潔に書く。


1年国語
芸術作品の鑑賞文を書こう

『河童と蛙』を鑑賞して

／年　組　番　名前　　モデル

この詩の魅力は、音読する人を楽しい気持ちにするところにあります。それは、河童が楽しく踊っている様子を表現を巧みに用いて生き生きと描いているからです。
まず、詩の中の「るんるん　るるんぶ　るるんぶ　るるん　つんつん　つるんぶ　つるんぶ　つるん」というリズミカルな表現です。声に出して読むと、思わずふきだしてしまいそうな音であり、河童が楽しく、唄ったり踊ったりしている様子が手にとるように伝わってきます。
次に、「月もじゃぼじゃぼ沸いている」というおもしろい表現です。河童の皿に映った月が沸いているように見えるほど激しく踊っているのか、それとも河童が熱くなって沸いているのか、深く考えさせられる表現です。
このように、作者草野心平さんは表現を巧みに用いて、楽しい作品に仕上げています。表現の特徴を生かしたすばらしい詩だと思います。

図１　モデルとなる鑑賞文

イ　音楽科における鑑賞の観点の提示

鑑賞文において，作品のよさ（魅力）を自分の意見として書くとき，単なる感想にならないように根拠や理由を明らかにして書くことが大切である。その根拠や理由とは，ある観点から作品を分析することによって明らかになる。観点とは，作品を見たり考えたりする切り口であり，音楽科や美術科での鑑賞における指導事項となっている。

そこで，音楽科の担当者に相談し，音楽科における鑑賞の観点とキーワードをまとめ，生徒に配布した。それが表１である。

特に留意した点は，鑑賞文を書く際に生徒が安易に用いている，「明るい・暗い・楽しい・悲しい」という直観的な言葉ではなく，できるだけ分析的な語彙を用いるように，具体的なキーワードを例示したことである。

ウ　マッピングによる書く材料の精選

何を書いたらいいのかが分からない生徒のために，発想を広げ，書く材料を集めて整理するための手法として，マッピングの指導を行った。

マッピングとは，キーワードから連想される幾つかの言葉を線で結び，更にそれらの言葉から連想される言葉を書き広げていく手法である。

当初の計画では，図２のように，作品名をワークシートの中心に書き，その周りにあらかじめ観点となる言葉を書いた上で，その観点をもとに自由にイメージを広げるというように書き方を指導した。

表１　音楽科における観点表

鑑賞文を書こう【音楽】

★キーワードを参考にして，『魔王』を鑑賞してみましょう。

観　点	キーワード	メ　モ
①詩の内容	物語のあらすじ 登場人物	
②音楽を形づくっている要素	要素：音色・リズム・速度 旋律・組み合わせ	
③物語と曲想とのかかわり	生き生きとした・流れるような・みずみずしい・優しい・愉快・不快・弾む・沈んだ・ゆったり・急いでいる・鋭い・鈍い・怖い・恐ろしい・気味悪い・静かな・さわやかな・広大な・落ち着いている・安心する	※明るい・暗い・楽しい・悲しいという言葉はなるべく使わない。
④音楽の特徴	声の種類：ソプラノ・アルト・テノール・バス 演奏形態：独唱・合唱・重唱 独奏・合奏・重奏 吹奏楽・オーケストラ 楽器：ピアノ	
⑤背景となる文化や歴史	作曲者：シューベルト 作詞者：ゲーテ 年代・時代・国（歴史・文化）	

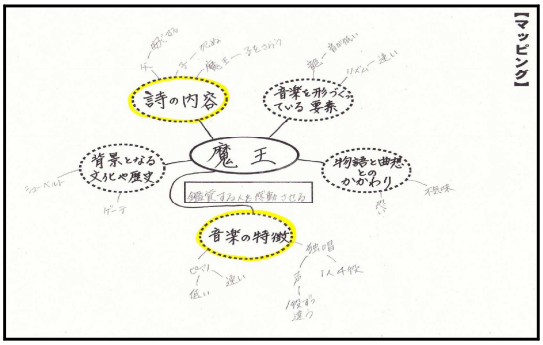


図２　生徒によるマッピング

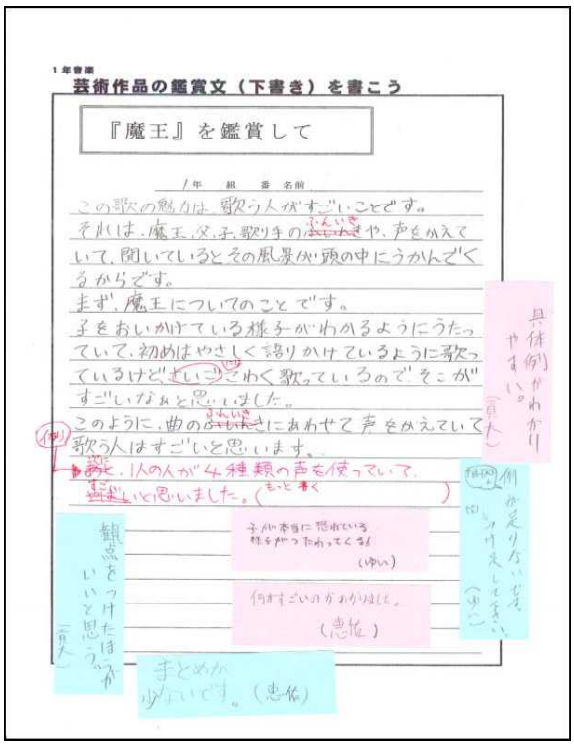


図３　付箋による交流活動

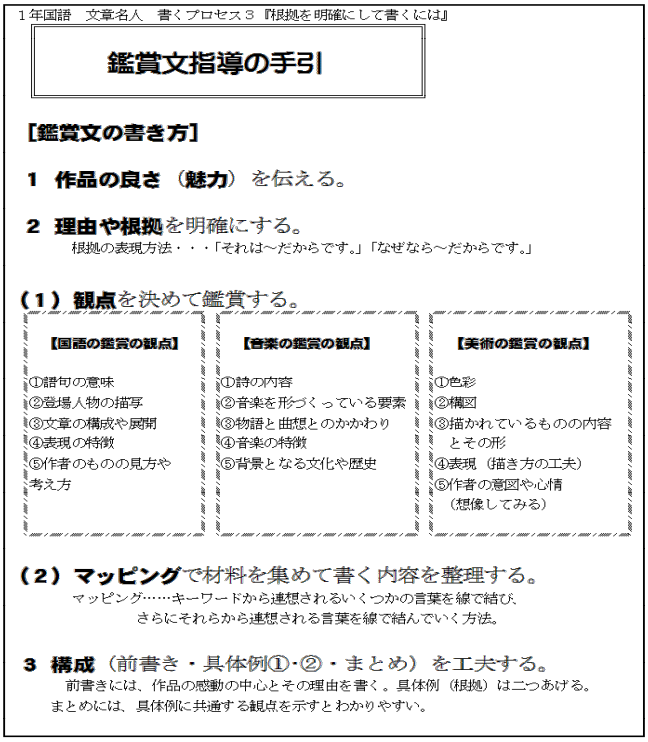


図４　鑑賞文指導の手引

エ　推こうのための交流場面の設定

鑑賞文を推こうさせるために，班で鑑賞文の下書きを交流する場面を指導過程に設定した。交流は，鑑賞文に三つの内容（作品のよさ・観点・根拠や理由）が書かれているかという観点で，４人の班員でお互いの鑑賞文を読み合い，良い点をピンクの付箋に，改善点を水色の付箋に書いて作品に貼るようにした（図３）。それをもとに，それぞれ自分の作品を推こうした。

⑶　鑑賞文指導の手引の作成と活用

他教科等の担当者が生徒に鑑賞文を書かせる際に活用できるように，図４のような鑑賞文指導の手引を作成した。各教科の観点については，それぞれの教科の指導内容であるため，音楽科と美術科の担当者と相談しながら，学習指導要領を参考にして決めた。その他の書き方については，音楽科と美術科の担当者から鑑賞文指導の際に悩んでいることを聞いた上で作成した。また，完成した手引は，美術科の学習において鑑賞文を書かせる指導を行った際に生徒に配布し，書き方の確認に用いた。

３　指導計画の作成

⑴　単元名・教材名

文章名人　書くプロセス３　『根拠を明確にして書くには』（５時間）

⑵　単元の目標

音楽の時間に書いた鑑賞文を書き直すという言語活動を通して，鑑賞文の特徴や書き方を理解することができる。

⑶　本単元における言語活動

音楽の時間に鑑賞した「魔王」の鑑賞文を書き直す。（関連：言語活動例ア）

⑷　単元の指導計画

時	ねらい，学習活動	指導上の留意点
1	○学習のねらいや進め方をつかむ。 音楽の時間に鑑賞した「魔王」の鑑賞文を書き直そう。 鑑賞文の目的や内容を知る。 ○身近な鑑賞文にはどのようなものがあるか考える。 ○教師が示した鑑賞文のモデルを読み，鑑賞文の目的と内容を知る。	・学習のねらいと，言語活動の内容を具体的に示し，学習の見通しをもたせる。 ・本やＣＤの帯，映画や絵画の紹介など身近にある鑑賞文を考えさせ，具体的にイメージさせる。 ・音楽の時間に書いた鑑賞文と鑑賞文のモデルを比較し，鑑賞文の目的･内容に合っているかを考えさせる。
2	音楽科の鑑賞の観点とキーワードを知る。 ○音楽科における鑑賞の観点とキーワードの表を読み，書くイメージをもつ。 『魔王』の曲を鑑賞しながらマッピングで書く材料を整理する。 ○教師が示した記入例を参考にマッピングで書く材料を整理する方法を知る。 ○『魔王』の曲を聴きながら，自分が強く感じたことをマッピングで分析する。	・音楽の授業を思い出させる。 ・マッピングは文章を書く際に，書く材料を整理する方法の一つであることを理解させる。 ・マッピングした表から，鑑賞文に書く観点を絞らせる。
3	マッピングをもとに，鑑賞文の下書きを書く。 ○マッピングした表から，鑑賞文として書く観点を絞り，根拠を明確にしながら書くことを確認する。 ○教師が示した構成を参考に，４００字程度の鑑賞文の下書きを書く。	・前時で示した鑑賞文のモデルを使い，①作品のよさ（魅力），②理由や根拠，③観点を明確にして書くと相手に伝わることを確認させる。
4	書いた鑑賞文を班で交流し，それを参考に推こうする。 ○班で鑑賞文を交流し適切な内容が書かれているか助言し合う。 ○付箋に書かれた内容を参考に，自分の鑑賞文を赤ペンで修正し推こうする。	・文章の良い点や改善するための助言を，付箋に書かせて，ワークシートに貼らせる。ピンクの付箋は良い点を書くため，水色の付箋は改善点を書くために使用することを説明する。
5	鑑賞文を清書する。 ○他の人からの助言や他の人の文章の良い点を参考にしながら推こうしたものを，清書する。 学習のまとめを行い，学習の振り返りをする。 ○単元の自己評価をワークシートに書く。	・①作品のよさ(魅力) ②理由や根拠③観点を明確にして書くよう指導する。 ・他教科等の学習において，芸術的な作品に接したときも，この手順で鑑賞文を書くことを確認する。

４　検証方法

振り返り学習の有効性を検証するために，生徒が書いた次の３種類の鑑賞文の内容を比較した。

・音楽の時間に書いた鑑賞文（指導前）　・国語の時間に書いた鑑賞文（指導時）　・美術の時間に書いた鑑賞文（指導後）

それぞれの鑑賞文を，分析する視点は次の三つである。

・感じ取った作品のよさ（魅力）を書いているか。　・作品を鑑賞した観点を書いているか。　・根拠や理由を明確にして書いているか。

三つの視点について，鑑賞文の中にその内容が明確に書かれていれば○，書かれていなければ×として，すべての鑑賞文を分析し，次のように比較した。

・はじめの計画通りに学習した学級とマッピングの書き方を修正した学級との比較 ・振り返り学習によって指導した学級と一般的な鑑賞文の指導をした学級との比較 ・美術の時間に鑑賞文指導の手引を活用した学級と活用しない学級との比較

Ⅴ　考察

１　マッピングの書き方の工夫について

当初は，マッピングのワークシートの中心に作品名を，その周りに鑑賞する観点を書き，その観点をもとに自由に発想を広げさせるように指導した（図２）。しかし，この方法ではなかなか発想が広がらず，多くの生徒がうまく書き込めない様子であった。

そこで，図５のようにマッピングの書き方を工夫した。ワークシートの中心には，作品から感じた魅力を一言（キーワード）で書かせ，そう感じた根拠となる作品の特徴をそれぞれの観点から分析して書き広げていく。さらに，どの観点からの特徴が自分の感動と強く関連しているかを考え，鑑賞文に書く内容として観点も含めて赤ペンで囲ませた。

その結果，生徒は多くの言葉を書き広げられるようになった。

図６は，当初のマッピングの方法で指導した学級（Ａ組）と，マッピングの書き方を修正して指導した学級（Ｂ組）の，国語の時間に書いた鑑賞文の比較である。Ｂ組の方に，作品を鑑賞した観点を書くという点において明らかな優位性が見られた。

図７は，Ａ組において当初のマッピングの方法で指導したとき（Ａ１組）と，書き方を修正して指導し直したとき（Ａ２組）の比較である。やはり，作品を鑑賞した観点を書くという点において，当初の指導よりも書ける生徒が15名増えている。

当初の書き方は，観点をもとに作品を分析し，その後で自分の感動の中心を明らかにするという方法であった。修正した書き方は，まず作品を鑑賞した第一印象で自分の感動の中心を一言で表現し，その感動のもとになったものは何かを，それぞれの観点から分析するという方法である。生徒にとっては，感動の中心を明らかにしてから作品を分析することで，書きたい内容が明確になり，マッピングを行いやすかったと考えられる。また，作品の特徴を観点も含めて赤ペンで囲むことによって，作品を鑑賞した観点を明らかにして書くことにつながったと考えられる。

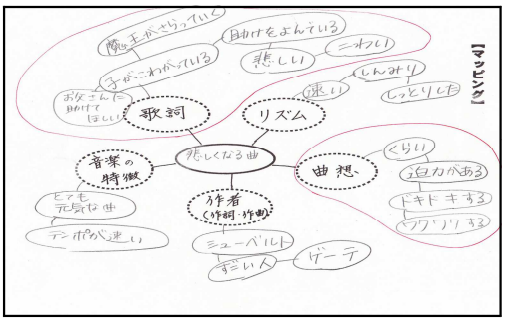


図５　生徒によるマッピング（修正後）

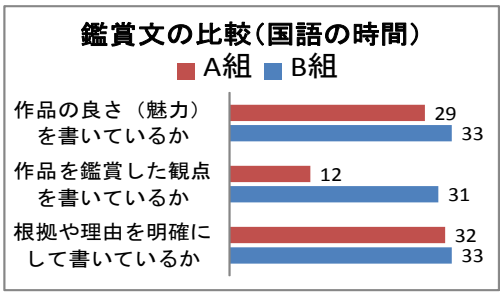


図６　マッピングの違いにおける比較

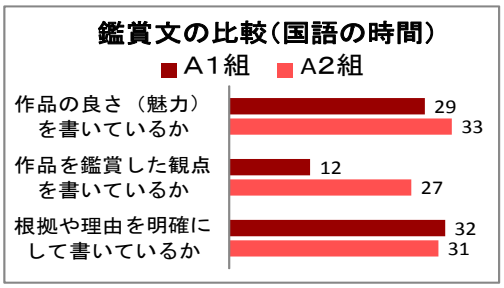


図７　マッピング修正における変移

２　振り返り学習の効果

振り返り学習の効果を確かめるために，振り返り学習を行った学級（Ｂ組）と，これまで指導してきた一般的な鑑賞文の学習を行った学級（Ｃ組）とで，国語の時間に書いた鑑賞文を比較した。指導方法の主な違いは，振り返り学習では音楽科で書いた鑑賞文を書き直すという言語活動を設定したのに対し，一般的な学習では自分の好きな曲の鑑賞文を書くという言語活動を設定したという点である。また，一般的な学習における鑑賞文のモデルは，教師が作成したものではなく，教科書の例文を活用した。

その結果，図８のように，振り返り学習を行った学級では，鑑賞の観点及び根拠や理由を明確にして書くという点において明らかな優位性が見られた。

これは，具体的なモデルの提示と音楽科の学習を振り返る活動によって，鑑賞文を書くという言語活動が，より現実的・実用的なものとして学習を進められたからではないか。

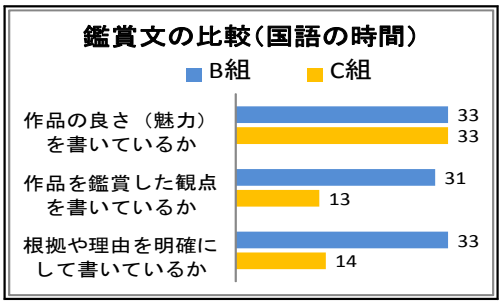


図８　振り返り学習の効果

３　鑑賞文指導の手引の活用

他教科における鑑賞文指導の手引の活用の効果を確かめるために，美術科の授業で鑑賞文を書く際に，生徒に手引を配布した学級（Ｂ組）と，配布せずに書かせた学級（Ａ組，Ｃ組）とで，美術の時間の鑑賞文を比較した（図９）。これまで述べてきたように，Ａ組，Ｂ組は振り返り学習を行った学級，Ｃ組は一般的な学習を行った学級である。

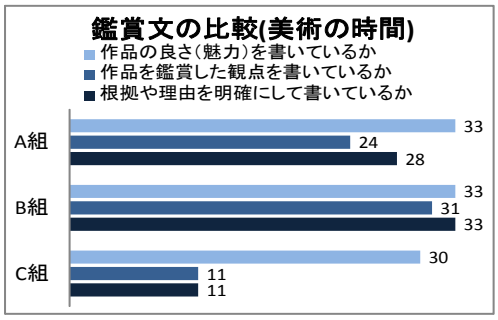


図９　鑑賞文指導の手引の活用

図６，７と図９を比較すると，手引を活用したＢ組は，美術科でも鑑賞の三つのポイントを押さえた鑑賞文が書けている。しかし，同じように振り返り学習を行ったＡ組でも，手引を活用しないために，鑑賞の観点及び根拠や理由を明確にして書けなかった生徒がそれぞれ３名いた。一般的な学習を行ったＣ組でも，手引を活用しないために，鑑賞の観点及び根拠や理由を明確にして書けなかった生徒が各２，３名いた。

鑑賞文指導の手引を美術科の担当者が配布したことによって，少しではあるが，鑑賞の観点及び根拠や理由を明確にして書くことの定着が図られたことが分かる。

Ⅵ　研究のまとめと課題

１　研究のまとめ

鑑賞文を書く際には，「自分が感じ取った作品のよさ(魅力)」「鑑賞する観点」「作品のよさ（魅力）を説明する根拠や理由（作品のよさ（魅力）のもとになる作品の特徴）」の三つのポイントを押さえて書くことによって，鑑賞したことを的確に書くことができる。

その能力を育成するために，他教科で書いた鑑賞文を振り返る学習として，適切なモデルの提示，マッピングの活用という手だてが有効であることが明らかになった。

また，国語科で学習したことをまとめた鑑賞文指導の手引を他教科の担当者が指導に活用することで，国語科で学習したことを生かして鑑賞文を書くことができるとともに，国語で学習した内容が更に定着することが分かった。

２　本研究における課題

本研究は，他教科（音楽）の学習で書かれた鑑賞文を国語科の授業で振り返り，鑑賞文の目的や内容の特徴に気付かせることにより，鑑賞したことを的確に書く能力が育成されることを，他教科と連携しながら確かめたものである。他教科の振り返り学習を国語科の授業で行うことの有効性は検証できたが，指導計画の中のどの手だてがより効果的であったのかは，明確に検証できなかった。また，鑑賞文以外のどのような言語活動において，国語科と他教科等が関連して取り組んでいけるのかという新たな課題もある。

＜引用文献＞
１　河野庸介　2009　『新中学校国語科重点指導事項の実践開発』，p. 56，明治図書

＜参考文献＞
河野庸介編著　2008　『新学習要領の展開』　明治図書
河野庸介・門戸千幸編著　2011　『中学校国語科新授業モデル（書くこと編）』　明治図書
須田実・花田修一・小森茂　2012『実践国語研究2/3』　明治図書
田中洋一編著　2009　『国語力を高める言語活動の新展開「書くこと」編』　東洋館出版社